

「ヨハネ福音書 21 章」の追加編集について

新型コロナの感染拡大がなおも予断を許さない状況にあります。皆様 いかにお過ごしでしょうか。行政の迅速、的確な対策のもと、一刻も早い収束を、と祈り願うばかりです。加えて、ミャンマーや香港、タイといった近隣諸国における、社会的・政治的に切迫した情勢もあります。さらにはここに来て、イスラエルとパレスチナの抗争がこれに加わり、これまた先行きの定かでない状況となっています。人々の生命と尊厳、人権、自由が侵されることなく保障されるように、と これらのすべてについて切に祈られています。「神の国は近づいた」との宣言が私たちの間で現実のものとなされますように。

こうしたなか、この年もまた、主イエスの受難から復活へと続く一連の暦が私たちのもとに訪れました。2021 年の今年^{ことし}は、2 月 17 日（水）がレント（受難節）の初日で、「灰の水曜日」。4 月 4 日（日）が「イースター（復活祭）」当日の その日でした。コロナの影響で様々な制約を強いられましたが、しかし それでもなお、それぞれに記念の良き時を持たれたことと思います。

当の私は というと、知人から YouTube の配信プログラムを紹介され、今年^{ことし}のレントからイースターの期間は、それを視聴して過ごしました。かの有名な英国イングランドのカンタベリー大聖堂^{カテドラル}（Canterbury Cathedral）の配信によるもので、「Morning Prayer（朝の祈り）」^{モーニング プレイヤー}とといいます。英国国教会で伝統的にまもられている朝ごとの時間で、内容的には 聖書の朗読、各種の祈り、講解的な小メッセージ、当日の記念日・記念の人物の紹介とそれにまつわる逸話等、といった構成になっています。私たちの馴染み^{なじ}からすると、朝の随想的な小礼拝といった感じでしょうか。それが毎朝なされ、毎回、世界中に配信されています。しかも、驚かされるのは、それをなんと、一人の人が連日 その人一人ですしているということ。その人というのが ほかでもない、「デーン（dean）」と呼ばれる大司祭（主任司祭のこと）である、ということです。カテドラルの責任者たる大司祭ですから、これ以外にも日常的に、重要な務めが様々あります。そうであるのに、モーニングプレイヤーを毎日 欠かさず、大司祭の役割として行なっているということ。それは 思うに、大司祭自身のそれにとどまらず、教会全体の理解として、そこに組み込まれている事柄の一つひとつが大切なものと捉えられ、歴史的伝統とされてきたということではないか、と そんなふうに思われています。ついでながら、カンタベリー大聖堂のデーンは現在 第 39 代目で、ロバート・A. ウィリス（Robert A. Willis）。モーニングプレイヤーの配信は、例えばイースター前後の特別な日などには アクセス数が一日にして 1 万を超えるほどで、—世界的ネットワークの英国国教会とはいえ—いかにも人気（？）の高いことが分かります。ただ、余談ですが、配信がカテドラルの中庭からなされ、しかも 毎回必ず、デーンの周囲をカテドラルのネコやブタやニワトリやシチメンチョウ・・・が好き勝手に動き回る、

という図。目に美しい庭と気持ちをホッコリさせる動物たちの姿という、そんな映像が人気の裏要因だという噂^{うわさ}もあって・・・？ いずれにせよ、信仰的にも心情的にも、はたまたお楽しみとしても、なかなか魅力的な配信です。お時間がおありのときに、映像だけでも御覧になってみてはいかがでしょうか。

前置きが随分と長くなってしまいました。このような書き出しをしたのはもちろん、カンタベリー大聖堂や英国国教会のコマーシャルをするためでも、ウィリス大司祭の後援をするためでもありません。そうではなく、配信から学ばされることが少なくなかったこと。特に、私たちの意外と知らない一面として、聖書を日々読むことと その講解から御言葉^{みことば}の語りかけを聴き取ることとを、英国国教会もまた大事にしているということ。そのことを今回、YouTube^{ユーチューブ} の配信を通して知らされたということなのです。そして、それとともに、とりわけ今回はそれ以上に、今年^{ことし}のモーニングプレイヤーが レントからイースターの期間、ヨハネ福音書の当該箇所をずっと そのテキストとしたということ。そのことに触発され、私もまた、ヨハネの記述の一連の推移に いま一度、思いをめぐらすところとされたのでした。実際、そこで示唆され、考えさせられたことは一つならずあります。事は、イエス・キリストがいよいよ十字架へと向かわれるその前後の出来事であり、そしてついには葬りの墓から甦^{よみがえ}られるイースター前後の出来事です。そこでの主題は当然ながら 受難と復活であり、主イエスのそれらが弟子たちにいかなることを引き起こしたのか、また 今日^{こんにち}の私たちにいかなることをもたらすのか、ということになります。そのようななかで、ただ、この私が今回 改めて思いを惹かれたのは、最終章の 21 章のことでした。弟子たちに対する主イエスの復活顕現^{さま}の様を記した、ヨハネ福音書を締め括^{くく}る最後の章です。カンタベリーのモーニングプレイヤーでは直接には触れられませんでした。関連する周辺的な講解を通じて ヒント^{もたら}を貰ったということもあります。

それは何かというと、つまりは、21 章がどうして いかにも 20 章までの補足のようにして最後に追加されたのか、ということです。21 章がヨハネ福音書^{へんさん}編纂の最終編集によって追加されたというのは、定説として広く知られているところです（詳しくは、本シリーズの「『ヨハネによる福音書』を読む前に」と「ヨハネによる福音書 21 章 20～25 節」を御参照ください）。20 章の終わりに「このほかにも・・・。これらのことが書かれたのは・・・」（30～31）とあり、福音書がそこで一度 閉じられている。にもかかわらず、21 章で再び 話が始まり、章末の 24～25 節で「これらのことについて証^{あか}しをし、それを書いたのは・・・。イエスのなされたことは、このほかにも・・・」と再度 全体が締め括^{くく}られていることから、そのことは分かります。しかし、要はその理由であり、その動機です。それについてはこれまでも何か所かで触れはしたのですが、自分自身、いま一つ焦点の定まらない 座りの悪い思いでいたのも事実です。それがどうやら、今回の再読・再考によって、もやもやが少しく晴れたように思われたのでした。これを読まれる皆様の中には、なにを今ごろ、と言われる方もおられるかもしれません。そんな方々には筆者の不足を率直に認めざるをえないのですが、今回 そのようにして気づかされたこと、そのことは 信仰や教会を大切に思う者にとって決して小さなことではないように思われます。そこで 今月は、通常の連続講解か

ら一時^{いつとき} 離れ、臨時の補筆として、随想的な一文を挿入させていただくことにしました。御了承いただけると幸いです。

今回の問題については 実際、各種 それなりの説明がなされていないわけでもありません。ヨハネ福音書の編纂時^{へんさんじ}には、激化する教会への迫害、その中での信仰共同体の保持・形成と宣教の展開、初代教会におけるペトロの地位復権、ヨハネの教会の強化・一体化・・・等々、教会を取り巻く一連の状況がありました。それらに照らしつつ、主イエスの復活という出来事を 念を押すようにして一度 追記する必要のあった理由を推察したものです。詳細は 上記の参照箇所のほか、21 章の 他の箇所の講解も御覧いただければと思いますが、ここではただ一つの点に絞って、この間^{かん} 気づかされたことを記してみたいと思います。事によると、どなたかによってどこかですでに述べられていて、それを目にされた方もおられるやもしれません。そのときは、筆者の勉強不足ということで、御寛恕^{ごかんじょ}いただければ幸いです。

論旨を追いやすくするため、以下 要点を絞って、できるだけ箇条的に記してゆきたいと思います。

まずもって思われるのは、この随想的補筆のベースとなる感想であり理解なのですが、イエス・キリストの弟子たちは結局、その全員が一人残らず挫折したのだ、ということです。これは決して耳新しい指摘でもなければ、改めてことさらに言及する必要もないことかもしれません。けれども、一度ならず耳にしてきたこのことが 実は、私たちの信仰にとっても教会にとっても、またその宣教にとっても決定的な意味合いを持つとしたら・・・。筆者は実際、今さらながらなのですが、この年のレントからイースターにかけて、このことに本当の意味で気づかされたように思っています。本シリーズの「21 章 1～14 節」のところで、次のように述べました。「4 つの福音書はどれも、弟子たちの側のこととしては そもそも、ドジと挫折と不信仰の記録でしかありません。なのに、イエス・キリストはそこに何度でも、慈しみの御手^{みて}を伸べてくださった。そのようにして、心を込めて、愛する者たちを育み育ててくださった。それがそもそも、福音書の記録というものなのではないかと思うのです」。この事実は、筆者には 今さらながらに、本質的で決定的なことのように思われたのでした。なぜならば、教会はなんと、否定しがたいこととして、一人残らず挫折した そのような弟子たちのその上に建てられたからです。

挫折し切って立ち上がれなくなっていたその弟子たちの上に、教会は建てられた。これは今回の補筆のかぎとなる点で、急所とも言える一点です。それは、教会は本質的に 人の力こぶや取り柄によってではなく、ひたすら神の御業^{みわざ}として、すなわちその恵みの・創造の・力の御業として建てられて始められたのだ、ということ、このことが物語っているからです。そして、それは具体的にはまさに、復活のキリストが自分たちに伴い立ってくださるという、弟子たちのその信仰の告白によるものでした。

21 章を見ると、1. ティベリアス湖（ガリラヤ湖）での大漁の出来事（1～14）、2. 主イエス

の 3 度の問いかけとペトロの 3 度の返答 (15~19)、3. 主イエスの ペトロへの戒め (20~23)、4. 結語 (24~25) となっています。

ここですぐにも気づかされるのは、この追加の章がガリラヤ湖での漁の記事から始められていることで、それがまた、誰にとっても どこか懐かしくも馴染みのある光景に思われることです。それもそのはず、第一に、主イエスの故郷がガリラヤだったこと。第二に、ペトロを代表格として、弟子たちの多くが同じくガリラヤの出身で、なおかつ漁師の出だったこと。そして第三に、彼らが主イエスによって弟子に召されたのが ほかでもない、ガリラヤ湖で漁をしているその時だったからです。その折の情景はそれぞれ、マタイ福音書 4:18~22、マルコ福音書 1:16~20、ルカ福音書 5:1~11 に記されていますが、なかでも ルカのそれは大漁の記事まで収めていて、ヨハネの 21 章と極めて似通っています。ただ、大漁の出来事が 2 度あったのかというと、主イエスの復活後のヨハネの記事のほうが元来の言い伝えであって、ルカのそれはどうやら これを弟子たちの召命と結びつけたものと、研究者の間では一般的に考えられているようです。いずれにせよ、ここでの問題は、— 2 度あったとしたら、それこそ文句なしの合致ですが — これらのすべてが弟子たちの宣教開始に位置づけられていることです。マタイもマルコもルカも「(あなたがたを) 人間をとる漁師にしよう」との主イエスの言葉を書き留めており、ヨハネの 21 章も言わずもがな、宣教へと再び送り出される弟子たちの再起物語として収められています。ただし、そこに一つだけ異なることがある。しかも、決定的に違うことが一つあります。それは、マタイ、マルコ、ルカにおける召命は、弟子たちの完全なる挫折で終わったということ。言い換えれば、生前の主イエスに召された弟子たちは、彼ら自身のダメさで挫折し、そのようにして そのすべてが終わってしまったということです。なのに、そんな自分たちに、主イエスがなんと もう一度 御自身を現わし、宣教に再び送り出してくださった。しかも、今度は前と違って、復活のキリストとして 常にどこまでも自分たちと共にいてくださっている。信仰によってそう受け止めた弟子たちにとって、事は今や、全く違うものとなったのではないのでしょうか。ヨハネ 21 章の書き出しは、この決定的な変化を意味しているように思います。

つまり、ガリラヤ湖といい漁師といい、それらはどれも、主イエスによる召命と弟子たちの宣教への参与を意味している。そして、それらはかつて、弟子たち・人間のダメさによって全き挫折に終わったものだった。けれども、それが今や、復活のキリストによって、かつてとは違う確かなものとされている。それがヨハネ 21 章の冒頭の物語の意味するところであり、ヨハネの教会が自らの信仰の告白として付け加えねばならなかったことではないのでしょうか。トマスの信仰をめぐる 20 章の終わり方では、その点がいかに不十分だからです。初めに召されたところ、すなわち 召命の原点・ガリラヤ湖に戻って、そこからもう一度、やり直す。ただし、今度は復活のキリストと共に・・・、ということです。

ヨハネの教会は実に、こう思い、こう信じたのでしょ。教会は人間の力によって建てられるものではなく、その宣教も人の強さによって実現されるものではない。事実、自分たちは全く挫折したのだから。しかし、神はその挫折者をもう一度 呼び出され、挫折を知るがゆえに、その者たちの上に御自身の教会をお建てになられた。以前とは違って、今や復活のキリストを頂いているのだから、た

ただ その伴いに信頼し、己^{おの}が務めを果たすことに励もう。それはまさに、彼らの現実であり、リアリティーであり、実存だったにちがいありません。激しい迫害のただ中での告白だったのですから。

こうして、ヨハネの教会は 21 章を追加し、教会の^よ拠^たって立つ基と宣教の原動力たるその源を明示したのだらうと思います。挫折せし者たちの再出発、新たな出発です。

大漁の書き出しに続く二つの記事（主イエスの 3 度の問いかけとペトロの 3 度の返答、主イエスのペトロへの戒め）は、こうした再起・再出発に際し、それらがとりわけ重要な意味合いを持っていたということではないでしょうか。そこには、しばしば言われるように、初代教会におけるペトロの復権問題もあったかもしれません。また、弟子たちの間やグループ間において、さらには教会間において、比較や競争やライバル意識といったものが生まれていたのかもしれませんが。これらの点については本シリーズの「ヨハネ 21 章」各回を御参照いただければと思いますが、しかしいずれにせよ、事の中心に置かれているのは一つに、「主よ、あなたは何もかもご存じです」(17) との挫折のペトロの^{しんおう}心奥からの告白であり、そのペトロを再び教会の^{ぼつかい}牧会と宣教に送り出される その主イエスの姿なのではないか。そしてまた一つに、そうした務めを人の前で・人との優劣においてではなく、ただ 再び召してくださったお方、復活のキリストへの信仰において真つすぐに果たすようにとの主イエスの呼びかけなのではないか、と そう思わされています。しかも、それは実は、ペトロという代表格の人物を通して 弟子たちのすべてに、そしてキリストに従う者たちのすべてに向けられたもののだとしたら……。事は決して 単なる追加の付記などとしては済ませられない、極めて大切なメッセージを内包していると言えはしないでしょうか。

このように、ヨハネ福音書の 21 章は 形式としては「補遺」ですが、内実としては全体を^し締め^く括する 福音書のまさに「核」であり、「焦点」とも「到着点」とも言うべき章のように思われます。言い換えれば、ヨハネの教会の自己理解がそこに示されているということです。教会というのはそもそもその存立の基盤を何に負っているのか、どなたからそれを頂いているのか、そして そこに召される者たちは何を知っているどんな者たちなのか、そしてまた だからこそ その働きの力を本質的にどこから受けるのかといった、教会の本質についての理解です。教会の「原点」と言ったらよいでしょうか。

教会が迫害や困難を内に外に抱えた時です。^よ拠^たって立つべきその原点や基盤をいま一度 想起し、再確認する。それは欠くことのできない、必然の要請と言えるでしょう。ヨハネの教会はそうにして、21 章を必要不可欠の章として追加編集したのではないのでしょうか。教会のいのちが、そこに懸かっていたからでした。

彼らが経験したこの出来事を、今この時を生きる私たちとその教会はどのように見るのでしょうか。また、彼らが経験したこの出来事は、今この時を生きる私たちとその教会に何を起こし、何をもたらすのでしょうか。

思えば、あのサウロがあのパウロへと、その名を変えることとなったあの出来事。それもまた、挫折と再起のそれでした。そして、そこでもまた、復活のキリストが事を起こされます。そのようにして、そこから、主の教会が建てられていったのでした。

ペンテコステ（^{せいれいこうりんび} 聖霊降臨日、^{ことし} 今年）は 5 月 23 日）へと向かう週の朝、カンタベリー大聖堂のウィリス大司祭はモーニングプレイヤーで次のように語っておられました。主の十字架の受難の後、弟子たちは自分たちだけで籠もっていた。ユダヤ人を恐れて というのがその理由だが、単にそれだけではなく、自分たちの今いるところを^{あと}後にし、そこを出て先に進むことが不安だったのかもしれない。しかし、それを可能にしたのが復活のキリストであり、約束の聖霊だった。今を後にし、再び先に進むこと。それは容易ではないが、巣籠もっていた弟子たちにその力を与えてくれたのが復活のキリストだった。弟子たちはそのようにして力づけられ、消えることのない喜びを与えられていったのである。そう黙想しておられました。これは それこそ、弟子たちの復活であり、新生であり、そして再起、再出発ということではないでしょうか。

主の復活の出来事は、葬りの暗い墓から始まります。それが 朝早く墓に赴く女性（たち）の明け方の薄明かりに変わり、そして、朝の光に照らされる復活のその時を迎えます。挫折と落胆から、希望の再起と再出発へ。ヨハネの教会もまた、そのようにして建てられていったのではないのでしょうか。21 章の追加は、その告白的編集のなせる業と思えてなりません。